復興事業にともなう発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み3

今回は、福島県南相馬市東町遺跡、上渋佐原田遺跡の発掘調査支援を実施しました。両遺跡は、防災集団移転事業にかかる住宅建設にともなう発掘調査で、期間は2014年5月7日から7月25日まで合計67日間、のべ29名の職員を派遣しました。

東町遺跡は、石組炉をもつ縄文時代中期の竪穴建物等が20棟以上検出された集落遺跡です。奈良では、なかなかお目にかかれない時期の集落遺跡のため、はじめは戸惑うことも多かったのですが、周りの調査員に助けていただいて、徐々に慣れることができました。上渋佐原田遺跡は、9世紀後半の集落と考えられますが、貞観地震（869年）と時期が重なります。津波により被災した人々が高台へ集落を移転させた可能性があります。千年後、歴史は繰り返されることを強く印象付ける調査となりました。

さて、これらの発掘調査は、南相馬市だけでなく、福島県や県財団、県内の市町村、沖縄県、高知県、京都府、茨城県の職員等、各地からの調査員が集結して調査をおこないました。奈良文化財研究所は、発掘調査はもちろんのこと、ポールを使用してタブレット等で遠隔操作する写真撮影や測量機材の提供といった調査関連分野でも協力し、発掘調査の効率化と高品質化を両立させることを目指しました。両遺跡とも遺構が多く、面積も広く、期日も限られていました。その中で、調査メンバーが、より効率的な調査の進め方を議論・実践することで、次第に調査員間の一体感が強まっていきました。復興事業を通じて各地のみなさんと協力体制を築けたことも、かけがえのない財産となりました。

（都城発掘調査部　青木 敬）

東町遺跡でポールを使った高所撮影をおこなう

「文化的景観学」検討会・公開ワークショップの開催

景観研究室では、分野を横断して文化的景観を論じる試みとして9名の外部有識者と「文化的景観学」検討会を立ち上げ、「学」としての文化的景観のフレームや可能性について検討してきました。そして、この検討会で描いてきたアウトラインについてさらに検討を深めることを目的とし、公開ワークショップというかたちで2014年6月30日に40名余りの研究者・行政担当者等とのディスカッションの場を設け、6班に分かれて議論をおこないました。

まず、議論の前半では、文化的景観のこれまでの取組における課題について検討しました。文化的景観は、多様な専門を引き寄せる魅力がある反面、その課題として、地域の主体性の醸成や文化的景観の価値共有の必要性、現状維持や事業の調整の難しさについて確認・共有しました。

議論後半では、文化的景観学のとらえ方、文化的景観を使って何をするのか、何ができるのか、について検討しました。ここでは、文化的景観学への期待として、文化的景観に取り組む人々を支えたり、個別の調査から価値評価の枠組を組み立てたりする「学」の必要性が指摘されました。いっぽうで、文化的景観を「学」として成り立たせるためには、文化的景観の保護に関する経験を深めておくことや、文化的景観の理論を確立させることが必要だが、現状では未熟であるといった指摘もありました。

文化的景観保護行政を支えるための「学」をいかにつくり上げていくか、実践から離れることなく今後も議論を深めていきたいと思います。

（文化遺産部　恵谷 浩子）

発表の様子（キャンパスプラザ京都）